

# Vinayavastuṭīkāに見られる『城喩経』註釈（1） —十二縁起支の定義—

仲宗根 充 修

本稿では、MūlasarvāstivādinayaのPravrajyāvastu（義浄訳『根本説一切有部毘奈耶出家事』）に対する註釈書Vinayavastuṭīkā（'Dul ba gzhi rgya cher 'grel pa）における十二縁起支の定義と、説一切有部の論書における十二縁起支の定義とを比較・考察する。

キーワード：根本説一切有部毘奈耶、出家事、城喩経、十二支縁起、説一切有部

## はじめに

MūlasarvāstivādinayaのPravrajyāvastu（義浄訳『根本説一切有部毘奈耶出家事』）には、Kalyāṇamitra（Dge legs bshes gnyen）によるとされるVinayavastuṭīkā（'Dul ba gzhi rgya cher 'grel pa）<sup>(1)</sup>（以下 VVT）という註釈書がある<sup>(2)</sup>。この註釈書に見られる『城喩経』に対する註釈の中で、十二支縁起説における各支分の定義が述べられている。

本稿では、VVTにおける十二縁起支の定義と、説一切有部の論書である『阿毘達磨大毘婆沙論』（Abhidharma-mahāvibhāṣa-sāstra）（以下 AMŚ）、『阿毘達磨俱舍論』（Abhidharmakośa-bhāṣya）（以下 AKBh）、『阿毘達磨順正理論』（Abhidharma-nyāyānusāra-sāstra）（以下 ANŚ）における十二縁起支の定義とを比較・考察する。

## 十二縁起支の定義

### (1) 老死

VVT: 老死というのは、現在の名色と六処と触

と受の分位であるもの、それが未来の老死であって、[すなわち]五蘊の分位である。<sup>(3)</sup>

AMŚ: 云何老死。謂即現在名色六處觸受位。在未来時名老死位。<sup>(4)</sup>

AKBh: それより後、受に至るまで[の分位]が老死である。生の後、受の分位に至るまでが老死であり、ここ（現在）における四支[すなわち]名色と六処と触と受であるもの、これらはまさに他（未来）における老死である。<sup>(5)</sup>

ANŚ: 至當受老死。…此生支後至當受支。中間諸位。總名老死。即如現在名色六處觸受四支。於未來生如是四位。名爲老死。<sup>(6)</sup>

### (2) 生

VVT: 生というのは、現在の識の分位であるもの、それが未来の生であって、[すなわち]五蘊の分位である。<sup>(7)</sup>

AMŚ: 云何生。謂即現在識位。在未来時名生位。<sup>(8)</sup>

AKBh: 実に、かの業によってこの世から死没した者には、来世における再結生がある。かの再結生が生である。ここ（現在）における識支であるもの、それはまさに他（未来）の生にお

けるかの生である。<sup>(9)</sup>

ANŚ: 結當有名生。…唯由業有。從此命終。復結當生。非異熟故。正結生有位。即立爲生支。<sup>(10)</sup>

### (3) 有

VVT: 有というのは、後有を思量するとき、身・語・意によって表示するもの、それが有であって、[すなわち] 五蘊の分位である。<sup>(11)</sup>

AMŚ: 云何有。謂追求時亦爲後有起善惡業。是有位。<sup>(12)</sup>

AKBh: そして、そのように駆け回るとき、彼は未来の有果をもたらす業をなすが、それが有である。彼が諸の対象を獲得するために駆け回るとき、後有をもたらす業を蓄積するが、それが彼の有である。<sup>(13)</sup>

ANŚ: 有謂正能造。牽當有果業。…如是所成。取爲縁故。馳求種種可意境時。必定牽生。招當有業。謂由愛力。取増盛時。種種馳求善不善境。爲得彼故。積集衆多能招後有淨不淨業。此業生位。總名有支。應知此中由此依此。能有當果。故立有名。<sup>(14)</sup>

### (4) 取

VVT: 取というのは、諸の資具を求めるとき、そのとき四方に駆け回るもの、それが取であって、[すなわち] 五蘊の分位である。<sup>(15)</sup>

AMŚ: 云何取。謂由三愛四方追求。雖涉多危嶮而不辭勞倦。然未爲後有起善惡業。是取位。<sup>(16)</sup>

AKBh: 一方、諸の資具を獲得するために駆け回る者の[分位]が、取である。境を獲得するために、尋求するようになった者があらゆる方向に駆け回るとき、その分位が取と呼ばれる。<sup>(17)</sup>

ANŚ: 爲得諸境界。遍馳求名取。…爲得種種可意境界。周遍馳求。此位名取。<sup>(18)</sup>

### (5) 渴愛

VVT: 渴愛というのは、その分位において三受すべてが生じつつ、姪と資具によって生じる貪りを起こす欲となるもの、それが渴愛であって、[すなわち] 五蘊の分位である。<sup>(19)</sup>

AMŚ: 云何愛。謂雖已起食愛姪愛及資具愛。而未爲此四方追求不辭勞倦。是愛位。<sup>(20)</sup>

AKBh: 資具と姪を貪る者の[分位]が、渴愛である。[五] 欲の対象と姪とに対する貪りが現行する分位が、渴愛と呼ばれる。いまだその境を尋求するようにならない間である。<sup>(21)</sup>

ANŚ: 貪資具姪愛。…貪妙資具。姪愛現行。未廣追求。此位名愛。妙資具者。謂妙資財。貪此及姪。總名爲愛。<sup>(22)</sup>

### (6) 受

VVT: 受というのは、楽苦を分別するとき、損害の原因を避けつつ、火に触れず、刀に触れず、排泄物に触れず、食に対する渴愛を生じさせながらも、資具によって生じる貪りを生じさせていないもの、それが受であって、[すなわち] 五蘊の分位である。<sup>(23)</sup>

AMŚ: 云何受。謂能別苦樂。亦能避損害縁。不觸火觸刀不食毒食糞。雖已起食愛而未起姪及具愛。是受位。<sup>(24)</sup>

AKBh: 分別する能力はあるが、姪の以前[の分位]が、受である。受の分位は姪に対する貪りが現行しない間である。<sup>(25)</sup>

ANŚ: 在姪愛前受。…已了三受因差別相。未起姪貪。此位名受。謂已能了苦樂等縁。姪愛未行。説名受位。<sup>(26)</sup>

處。<sup>(34)</sup>

## (7) 触

VVT: 触というのは、根と境と識などの和合による触が生じながらも、楽苦を決して分別せず、損害を避けず、火に触れ、毒や刀や排泄物に触れるもの、それが触であって、[すなわち]五蘊の分位である。<sup>(27)</sup>

AMŚ: 云何觸。謂眼等根雖能與觸作所依止。而未了知苦樂差別。亦未能避諸損害緣。觸火觸刀食毒食糞。食姪具愛猶未現行是觸位。<sup>(28)</sup>

AKBh: 楽と苦等の原因を知る能力より以前[の分位]が、触である。三事の和合から触がある。彼が三受の原因を分別することができない間の、その分位が触と呼ばれる。<sup>(29)</sup>

ANŚ: 於三受因異。未了知名觸。…薄伽梵說。根境識三具和合時。說名為觸謂未能了三受因異。但具三和。彼位名觸。<sup>(30)</sup>

## (8) 六処

VVT: 六処というのは、眼と耳と鼻と舌と身と意という六処が生じながらも、根と境と識の三事和合による触が生じていないもの、それが六処であって、[すなわち]五蘊の分位である。<sup>(31)</sup>

AMŚ: 云何六處。謂已起四色根。六處已滿即鉢羅奢佉位。眼等諸根未能與觸作所依止。是六處位。<sup>(32)</sup>

AKBh: 三事和合の以前[の分位]が、それ(六処)である。六処が生起し終わり、根と境と識の三事が和合しない間の、その分位が六処と呼ばれる。<sup>(33)</sup>

ANŚ: 從生眼等根。三和前六處。…即此名色爲緣所生。具眼等根。未三和合。中間諸蘊。說名六處。謂名色後。六處已生。乃至根境識未具和合位。下中上品。次第漸增。於此位中。總名六

## (9) 名色

VVT: 名色というのは、結生相続のとき、六処が生じていない間の、カララとアルブダと[ペーシーと]ガナ[と]プラシャーカーの分位であるもの、それが名色であって、[すなわち]五蘊の分位である。<sup>(35)</sup>

AMŚ: 云何名色。謂結生已未起眼等四種色根。六處未滿中間五位。謂羯刺藍。頰部曇。閉尸。鍵南。鉢羅奢佉。是名色位。<sup>(36)</sup>

AKBh: それ以後、六処が生起する以前[の分位]が名色である。結生の心の後、六処が生起していない間の、その分位が[名色]と呼ばれる。「四処が生起する以前」と説かれるべきであるにもかかわらず、「六処[が生起する以前]」と説かれているのは、そのとき、それ(身と意の二処)が確立するからである。<sup>(37)</sup>

ANŚ: 六處前名色。…結生識後。六處生前。中間諸位。總稱名色。豈不已生身意二處。應言此在四處生前。<sup>(38)</sup>

## (10) 識

VVT: 識というのは、母胎において識が結生相続するもの、それが識であって、[すなわち]五蘊の分位である。<sup>(39)</sup>

AMŚ: 云何識。謂續生心及彼助伴。<sup>(40)</sup>

AKBh: 一方、結生する蘊が識である。母胎に結生する刹那における五蘊が識である。<sup>(41)</sup>

ANŚ: 識正結生蘊。…於母胎等。正結生時。一刹那位五蘊名識。<sup>(42)</sup>

## (11) 諸行

VVṬ: 諸行というのは、過去の生の福と非福の業の分位であるもの、それが諸行であって、[すなわち]五蘊の分位である。<sup>(43)</sup>

AMŚ: 云何行。謂過去業位。<sup>(44)</sup>

AKBh: 過去の業の[分位]が諸行である。「分位」というように補われる。まさに過去の生存における福等の業の分位であるもの、それがここでは諸行と呼ばれる。その業がここにおいて異熟するのである。<sup>(45)</sup>

ANŚ: 宿諸業名行。…於宿生中。福等業位。至今果熟。總立行名。<sup>(46)</sup>

## (12) 無明

VVṬ: 無明というのは、過去の生の煩惱の分位であるもの、それが無明であって、[すなわち]五蘊の分位である。<sup>(47)</sup>

AMŚ: 云何無明。謂過去煩惱位。<sup>(48)</sup>

AKBh: さて、これら無明等とは何か。過去の煩惱の分位が無明である。過去の生存における煩惱の分位であるもの、それがここでは無明と呼ばれる。なぜなら、俱時に行じるからであり、その(無明の)力によってそれら(諸煩惱)は現行するからである。「王が来る」と言われたとき、彼の随従者が来ることも成就されるように。<sup>(49)</sup>

ANŚ: 宿惑位無明。…論曰。於宿生中。諸煩惱位。至今果熟。總謂無明。<sup>(50)</sup>

## おわりに

比較・考察の結果、VVṬにおける十二縁起支の定義は、AMŚにおける十二縁起支の定義と

比較的近接する内容であることから、AKBhやANŚにおける十二縁起支の定義よりも前段階に位置づけられると考えられる。

今後、さらにVVṬを読み進め、説一切有部の論書と比較することによって、VVṬの成立及び思想史上の位置について解明していきたい。

## 略号表

AKBh = Pradhan, ed. *Abhidharmakośa-bhāṣya of Vasubandhu*, Patna, 1967.

AMŚ = 『阿毘達磨大毘婆沙論』(T. 27, No. 1545) (*Abhidharma-mahāvibhāṣa-sāstra*).

ANŚ = 『阿毘達磨順正理論』(T. 29, No. 1562) (*Abhidharma-nyāyānusāra-sāstra*).

D = Derge Edition of the Tibetan Tripiṭaka.

P = Peking Edition of the Tibetan Tripiṭaka.

T = 『大正新脩大藏經』.

VVṬ = *Vinayavastuṭīkā*.

## 参考文献

Lalou 1953. "Les textes bouddhiques au temps du roi Khri-sron-lde-bcan," in *Journal Asiatique*, pp. 313-353.

沖本克己 1985. 「律文献」『講座敦煌 6 敦煌胡語文献』大東出版社, pp. 395-418.

楠本信道 2007. 『俱舍論』における世親の縁起観』平楽寺書店.

仲宗根充修 2004. 「説一切有部所伝の「城邑経」とその展開」『仏教史学研究』47(1), pp. 1-27.

羽田野伯猷 1983. 「チベット流伝前期の王室仏教備考—勅裁小品Vyutpattiと目録デンカルマをめぐる—」『仏教と文化』同朋出版社, pp. 281-312.

原田覺 1982. 「IDan dkar ma目録考」『田村芳朗博士還暦記念論集 仏教教理の研究』春秋社, pp. 607-617.

山口益・舟橋一哉 1955. 『俱舍論の原典解明 世間品』法蔵館.

- 山口瑞鳳 1978. 「吐蕃王国仏教史年代考」『成田山仏教研究所紀要』3, pp. 1-52.  
 山口瑞鳳 1985. 「『デンカルマ』八二四年成立説」『成田山仏教研究所紀要』9, pp. 1-61.  
 芳村修基 1974. 『インド大乘仏教思想研究—カマラシーラの思想—』百華苑.

註

- (1) 註釈者についての詳細は不明であるが、これと同一の書名が9世紀前半に成立したとされる『デンカルマ目録』に記載されている。もしもこの目録に記載されている書名が、現存する VVT を指すのであれば、この資料は遅くとも9世紀前半までにチベット語に翻訳されたと考えられる。Cf. 『デンカルマ目録』494: 'dul ba bzhi'i (=gzhi'i) rgya cher 'grel la. Cf. Lalou (1953: 330), 芳村 (1974: 162), 沖本 (1985: 406). Cf. 芳村 (1974: 109-114), 山口 (1978: 18-20), (1985), 原田 (1982), 羽田野 (1983: 283).
- (2) 拙論 (2004).
- (3) D No. 4113 Tsu 298a7 | P No. 5615 Dzu 343a3-4.
- (4) T. 1545, p. 119a22-23.
- (5) AKBh, p. 132<sup>21-24</sup>.
- (6) T. 1562, p. 483c28, pp. 492c28-493a1.
- (7) D No. 4113 Tsu 298b5-6 | P No. 5615 Dzu 343b3-4.
- (8) T. 1545, p. 119a21-22.
- (9) AKBh, p. 132<sup>18-21</sup>.
- (10) T. 1562, p. 483c28, p. 492c16-18.
- (11) D No. 4113 Tsu 298b6 | P No. 5615 Dzu 343b4-5.
- (12) T. 1545, p. 119a20-21.
- (13) AKBh, p. 132<sup>15-18</sup>.
- (14) T. 1562, p. 483c27, p. 491b10-14.
- (15) D No. 4113 Tsu 298b6-7 | P No. 5615 Dzu 343b5.
- (16) T. 1545, p. 119a18-20.
- (17) AKBh, p. 132<sup>14-15</sup>.
- (18) T. 1562, p. 483c26, p. 488b24-25.
- (19) D No. 4113 Tsu 298b 7-299a1 | P No. 5615 Dzu 343b6-7.
- (20) T. 1545, p. 119a16-17.
- (21) AKBh, p. 132<sup>12-13</sup>.
- (22) T. 1562, p. 483c25, p. 487a24-26.
- (23) D No. 4113 Tsu 299a1-2 | P No. 5615 Dzu 343b7-344a1.
- (24) T. 1545, p. 119a13-16.
- (25) AKBh, p. 132<sup>9-11</sup>.
- (26) T. 1562, p. 483c25, p. 487a22-24.
- (27) D No. 4113 Tsu 299a2-3 | P No. 5615 Dzu 344a1-2.
- (28) T. 1545, p. 119a10-13.
- (29) AKBh, p. 132<sup>7-9</sup>.
- (30) T. 1562, p. 483c24, p. 487a19-21.
- (31) D No. 4113 Tsu 299a3-4 | P No. 5615 Dzu 344a2-4.
- (32) T. 1545, p. 119a8-10.
- (33) AKBh, p. 132<sup>5-6</sup>.
- (34) T. 1562, p. 483c23, p. 486b20-24.
- (35) D No. 4113 Tsu 299a4-5 | P No. 5615 Dzu 344a4-5.
- (36) T. 1545, p. 119a5-8.
- (37) AKBh, p. 132<sup>1-4</sup>.
- (38) T. 1562, p. 483c22, p. 485c23-24.
- (39) D No. 4113 Tsu 299a5-6 | P No. 5615 Dzu 344a5-6.
- (40) T. 1545, p. 119a5.
- (41) AKBh, p. 131<sup>24-25</sup>.
- (42) T. 1562, p. 483c22, p. 484b14-15.
- (43) D No. 4113 Tsu 300a3 | P No. 5615 Dzu 345a7-8.
- (44) T. 1545, p. 119a4-5.
- (45) AKBh, p. 131<sup>21-23</sup>.
- (46) T. 1562, p. 483c21, p. 484a27-28.
- (47) D No. 4113 Tsu 300a3-4 | P No. 5615 Dzu 345a8.
- (48) T. 1545, p. 119a4.
- (49) AKBh, p. 131<sup>17-20</sup>.
- (50) T. 1562, p. 483c21, pp. 483c29-484a1.